

令和 2 年 5 月 14 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K15747

研究課題名(和文) 地域での地域医療実践教育拠点による総合診療及び総合診療医教育体制の有用性の検

研究課題名(英文) Verification of the efficacy of newly setted department General Medicine and comprehensive medical educational system in the rural area Tamana city.

研究代表者

小山 耕太 (Oyama, Kohta)

熊本大学・大学院生命科学研究部(医)・非常勤講師

研究者番号：60748127

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、地域における総合診療科の診療効率及び地域医療実践教育拠点を中心とした総合診療医教育体制の有用性を明らかにする為、公立玉名中央病院(当院)総合診療科入院患者及び当院職員、玉名郡市医師会関係者に対しアンケート調査を実施した。結果、玉名地域における教育拠点による医師育成に対し多くの方が協力的である事が示され、約4年の時間を経て、当院入院・外来患者数増加(救急搬送有明医療圏最多と不応需率5%未満を達成)と常勤医師数及び診療科の増加にも寄与している事が分かった。最後に地域での医師育成は、地域医療の発展を経て、中長期的に地域の医師不足や医師の都市部集中・偏在の解消に有効であると結論付ける。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1) 総合診療科(当科)入院患者109名対象の入院満足度調査。結果)満足度は80%以上。医師育成に対し、多く(80%)の患者が協力的。課題)基本的な挨拶や自己紹介の徹底。2) 玉名郡市医師会所属医師、医療機関勤務医師(123名)を対象の地域医療連携に対する満足度調査。結果)医療連携での当科の診療の質(知識・技術・態度)に対し90%以上が満足。課題)診療経過報告書作成の徹底。救急医療体制の整備。後継者不足。3) 公立玉名中央病院の職員703名を対象の医師育成に対する意識調査。結果)自院での医師育成に対し、全体的に協力意識は高い(70%)。課題)医師育成による具体的な効果についての周知。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the efficiency of the department of general medicine in the community and the usefulness of the general medical doctor education system at the community medicine practice center. A questionnaire survey was conducted for staff of this hospital and those involved in the Tamana Medical Association. As a result, it was shown that many people are cooperative with the training center in the Tamana area, and after about four years, the number of in/outpatients increased (the number of emergency transport in Ariake areas was the highest and achieved a refusal rate of less than 5%) and the number of full-time physicians and medical departments also increased.

Finally, it is concluded that the training of doctors in the community is effective in relieving the shortage of doctors in the community and the uneven distribution of doctors in urban areas over the certain period of time through the development of community medicine.

研究分野：総合診療

キーワード：地域医療 医師育成 教育拠点 医師不足 教育体制 総合診療 医師会 救急医療

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

熊本県の医療体制の充実度は医師数で見ると、人口10万人当たりの医師数は266.4人と全国平均の226.5人を上回る全国10位である*1。特に、熊本市においてのそれは394.6人と大幅に多いのが現状である。つまり、熊本市では熊本大学医学部附属病院を含めて高度医療を提供できる病院群が集中しており、医療レベルと医師数の両面で恵まれた環境にある。一方、熊本県内の他の多くの二次医療圏においては、芦北医療圏の266.1人を除き全てが全国平均を下回っているのが現状である。最も医師数の多い熊本医療圏と最も医師数の少ない阿蘇医療圏(121.2人)の格差は3.26倍と、熊本県下の医師の偏在は極めて深刻な状況である。

本研究により、総合診療科と地域医療教育拠点を新設することの、地域への貢献度が明らかにされ、医師不足に対する対応策への提言が行われる見通しである。更に、問題点の改善に向けた取り組み、例えば新規の「地域医療実践教育拠点」を設置が行われることで、大学と地域の間を循環的に医師が配置することを可能にすると同時に、地域を担う総合医を地域で育成する教育システムの構築に大きく寄与し、将来、県内の医師確保等につながることを期待される。

2. 研究の目的

申請者らは、2009年度及び2014年度に熊本県内の全有床病院に対して病院アンケート調査を実施し、熊本県における地域医療の問題点について報告した。ここで得られたプライマリ・ケアを主に行う医師のニーズの高さに端を発し、2015年4月に公立玉名中央病院に「地域医療実践教育玉名拠点」及び「総合診療科」が新設された。本研究では、地域における総合診療科新設及び地域医療実践教育拠点設置による総合診療医教育体制の有用性を明らかにし、新規設置地域選定の有効な資料とし、同時に日本の地域の医師不足解消への足掛かりにすることを目的とする。

3. 研究の方法

横断研究：本研究では、以下の3種類のアンケート調査を実施。

- (1) 教育拠点新設後の3年間の成果として、2018年4~8月に総合診療科入院患者109名を対象に入院満足度調査についてアンケート調査を実施し、当科を研修中の研修医及び総合診療専門医プログラム研修中の専攻医による診療に対する患者満足度と、当科での診療・教育体制に対して半構造化アンケート調査で評価した。

結果) 診療に対する満足度は80%以上の良好な回答であり、担当医師(研修医・専攻医)に対する態度・知識・技術面の評価も高いことが分かった。更には、診療・教育体制に対しても良好な満足度が得られた。そして、患者視線の地域における医師育成に対する意識については、多く(80%)の患者が、自身の診療を通して若手医師が育成されることに協力的であることも示された。

課題) 多くの研修医・専攻医が研鑽を積む中で医師-患者関係の構築において、基本的な挨拶や自己紹介の励行が徹底される必要性も浮き彫りとなった。

以上の結果を踏まえ、今後、玉名地域で若手医師が育成される過程においては、患者協力は十分に備わっており、協力体制を維持する上で、診療のみならず礼儀作法から徹底した教育指導体制の構築が必要不可欠であり、喫緊の課題と言える。

- (2) 教育拠点新設後の3年間の成果として、2018年7・8月に玉名郡市医師会所属医師、並びに医療機関勤務医師の先生方(123名)に地域医療連携に対する満足度及び地域での医師育成に対する意識についてのアンケート調査用紙を郵送し、74名(60.2%)の先生方より回答を得た。

結果) 医療連携において総合診療科の診療の質(知識・技術)、診療依頼に対する対応や紹介のし易さ(態度)に対して90%以上の満足を得ていることが分かった。更には、「地域での医師育成」の取り組みに対し、玉名郡市医師会所属の先生方の多くは協力的であり、ゆっくりにあるが地域に勤務する医師数増加の効果を実感しつつある事が示唆された。

課題)

総合診療科の診療内容の詳細について、更なる周知における工夫が必要。

紹介患者の診療経過報告書・返書作成を徹底するシステム構築が必要。

公立玉名中央病院の救急医療体制の早急な整備が必要。

地域を担う医療機関の医師も高齢化が進み、後継者が不足。

以上の結果を踏まえ、これまで玉名地域で育成された人材が、近い将来県内各地域に赴き、「医師育成を通じた地域の医師不足解消」の為に更なる足掛かりになることが期待される。

- (3) 上記(2)の玉名郡市医師会所属医師、並びに医療機関勤務医師を対象とした調査の結果を受け、実際に教育拠点が設置された公立玉名中央病院の職員703名に対しても、意識調査を実施し592名(84.2%)より回答を得た。

結果) 自院での医師育成について、全体的に教育に対する協力意識は高い(70%)ことが判明した。

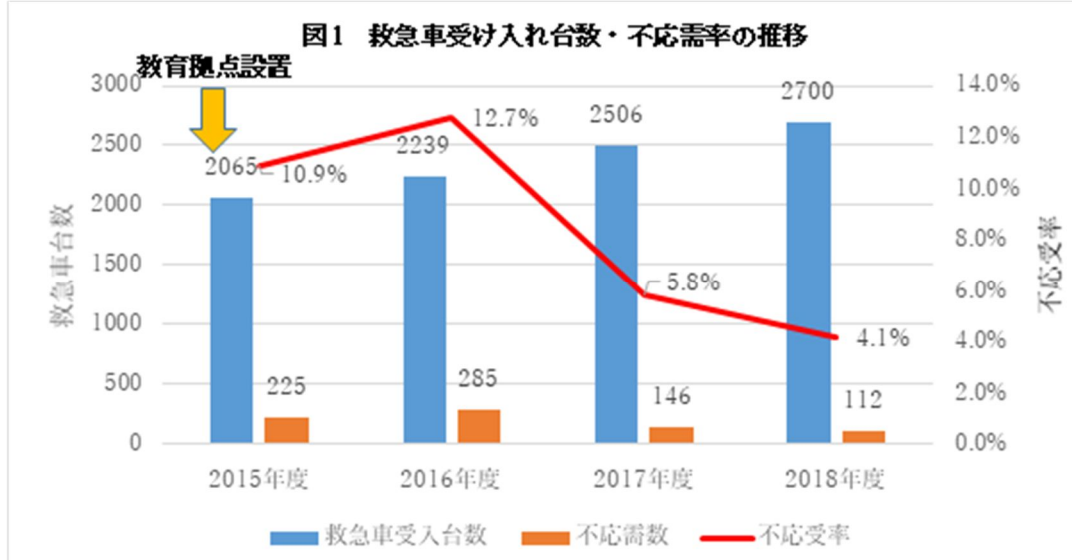
課題) 地域での医師育成と医師不足解消とが直接的に有効であるか否かについての理解は十分に浸透していない(図27)ことも示された。従い、今後の課題として「医師育成を通じた

地域の医師不足解消」について、教育に対して協力的な多くの病院職員に対し、具体的な効果を示すことで、如何に地域での医師育成が地域の医師不足解消に効果的であるか、理解を深めることが課題として浮き彫りとなった。

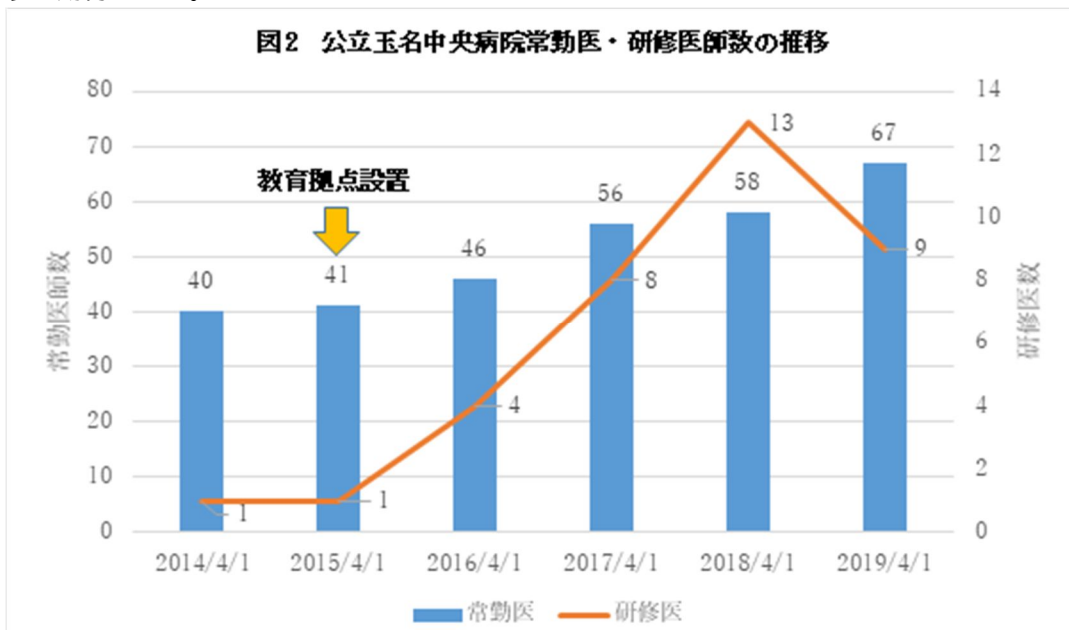
4. 研究成果

本調査で、教育拠点新設後の4年間の成果として、教育拠点及び総合診療科による地域に対する効果について調査した。

地域における医師育成の取り組みは、医師不足解消を目的とせず、教育・診療体制の構築に始まる。まず、学習者(医学生・研修医・専攻医)を教育する為に最も初期の段階で重要なことは、彼等が経験し、学ぶために必要な症例(患者)を集めることである。この症例を集めるにあたり、断ら(れ)ない医療の提供は必然であり、結果的に約1年間の救急診療体制の調整(平日日勤帯の救急シフトを当番制から固定制へ)を経て、救急車受け入れ台数の増加(有明医療圏最多)と、不応需率の低下(5%未満)を達成した(図1)。これにより、地域完結型の医療への貢献も明らかになった。



更には、何よりも医師育成・教育において不可欠な、関係各所の高いレベルの協力意識も確認され、結果的に教育拠点のある公立玉名中央病院の研修医数の増加をはじめ、常勤医師数の増加や、常勤医が在籍する診療科の新規設置に大きく寄与(図2)し、玉名郡市地域医療に対しても、病診・病病連携にある程度の効果が示された。一方で、教育の過程で、多くの学習者が研鑽を積む中で態度面における指導の必要性も浮き彫りとなり、学習者・指導医・協力者の関係性の上で、大きな課題であることも分かった。そして、これらの取り組みと効果について、地域住民をはじめ地域医療機関関係者の方々への周知徹底も必要であることも分かり、本報告書がその役割を担うと期待される。



最後に、地域での医師育成は、ゆっくりではあるが確実な地域医療の発展と進化を経て、中長期的に地域の医師不足や医師の都市部集中・偏在の解消に有効であると結論付ける。

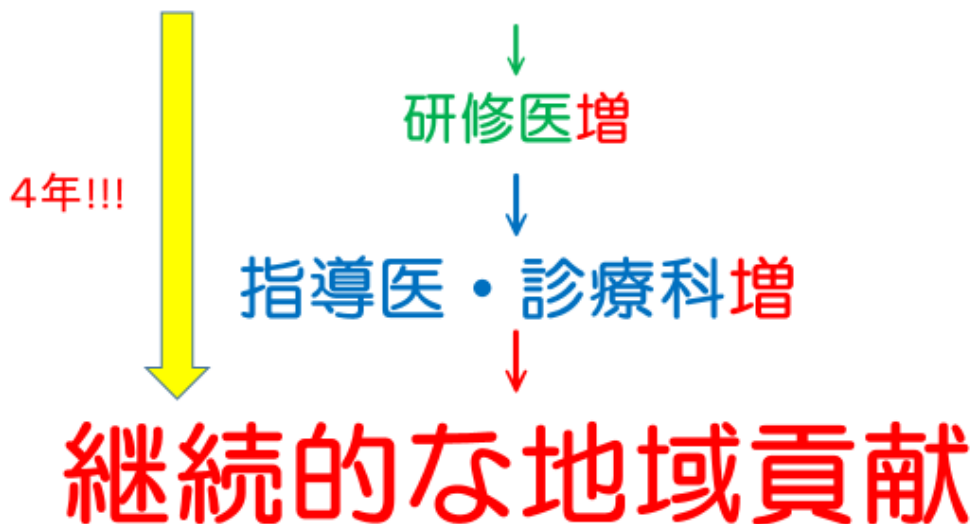
地域の医師不足解消への道

☆卒前・卒後**教育**の体制・システムの構築☆

STEP 1 : **症例**を集める

STEP 2 : **救急診療**体制の整備

STEP 3 : **断ら(れ)ない**救急の実践



筆者講演資料から引用

<引用文献>

小山耕太ら:「地域医療の現況アンケート調査」2014年度報告書

黒田豊ら:「病院アンケート調査」2010年度報告書

松村真司、大野每子、尾藤誠司、福原俊一:米国内科学会 外来患者満足度評価指標 (ABIM-PSq)日本語版の開発.厚生科学研究費補助金政策科学推進研究「かかりつけ医の診療プロセスとアウトカムに関する研究」平成 15 年度報告書.

PSQ Project Co-Investigators: Final Report on the Patient Satisfaction Questionnaire Project. Philadelphia, PA, American Board of Internal Medicine, 1989

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小山耕太
2. 発表標題 地域における総合診療科及び地域医療実践教育拠点を中心とした総合診療医教育体制の有用性の検討
3. 学会等名 第8回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小山耕太
2. 発表標題 地域医療志向を有する医師の育成
3. 学会等名 第9回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小山耕太
2. 発表標題 総合診療医の育成
3. 学会等名 日本プライマリ・ケア連合学会第13回九州支部総会・講習会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小山耕太
2. 発表標題 地域での総合診療医育成
3. 学会等名 第8回九州地域医療教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小山 耕太
2. 発表標題 病院総合医教育の最先端
3. 学会等名 第19回日本病院総合診療医学会学術総会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田宮 貞宏 (TAMIYA SADAHIRO)		
研究協力者	安成 英文 (YASUNARI EIBUN)		
研究協力者	松井 邦彦 (MATSUI KUNIHICO)		
研究協力者	谷口 純一 (TANIGUCHI JUNICHI)		
研究協力者	前川 久美子 (MAEKAWA KUMIKO)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	永田 恵里香 (NAGATA ERIKA)		
研究協力者	永杉 憲弘 (NAGASUGI NORIHIRO)		